

「東京女子大学 日本文学」第112号

小宮くんの追悼号です。

該当部分を抜粋して紹介いたします。

# 東京女子大學 日本文學

第百十二號

小宮彰 教授追悼号

## 目次

小宮彰先生をしのぶ

小宮彰先生 主要業績目録

海上の道 一パリから西表へ一

つぶやく兼好 一第四一段小考一

「源氏物語」研究

—紫の上の幼少期に込められた意味—

「とりかへばや物語」宰相中将論  
—「有明の別れ」との比較を通して—

近世の服飾語彙

—浮世草子・洒落本を中心として—

松浦理英子 「親指Pの修業時代」論  
—その多様なセクシュアリティを読み解く—

世阿弥能本「知章」語彙総索引稿

金子 彩香 (六九)  
山本 康世 (一〇五)

佐野佳矢乃 (五二)

堀井 彩香 (六九)  
岩村 良子 (一九)大久保喬樹 (一一)  
中野 貴文 (一九)今井 久代 (一)  
(五)

- 東京女子大学図書館所蔵 伝正徹筆「古今和歌集」翻刻稿 (二) (二三九)  
東京女子大学古典文学研究会
- 格助詞「に」と「で」の深層格  
—出現状況把握に向けての問題点の整理—
- 丸山 直子 (一七五)
- 第三十五回 松村縁賞 (一六五)
- 二〇一五年三月卒業論文題目 (一六五)
- 二〇一五年三月修士論文題目 (一七二)
- 東京女子大学日本文学研究会規約 (一七三)



小宮 彰 教授

## 小宮彰先生をしのぶ

小宮彰先生の訃報が突然飛び込んできたのは二〇一五年の一月二十二日のことだったか。ちょうど会議室に数人が集まっていたときだったよう記憶している。

このところ、お具合が悪いようなご様子だったので、三月のオープンキャンパスを近藤先生が交替されると決まつた矢先だった。丸山先生が十八日にメールを送つてもお返事がなかつたのだが、あとでわかつたことだが、そのころ既に先生はあちらの世界へと旅立たれたあとだつたのだ。

小宮先生は、二〇〇九年度の現代教養学部への改組にあたつて、人文学科日本文学専攻に移つていらつしやつた。ご専門は比較文学・文化である。先生は哲学科に着任されたあと、共通教育（副専攻）に移られて、全学に向けて東京女子大学の特徴である比較文学・文化の教育を担うほか、コンピュータと人間を考える授業を担当されていて。先生の世代（それも文系）にしては珍しいことだが、大変コンピュータにお詳しかつたのである。そして、比較文学・文化において日本近現代文学（というより寺田寅彦を扱われるなど、文学だけでなく評論や思想に重きを置かれていたようだが）も取り上げるからということで、日本文学専攻に移つてきて下さつた。

日本文学専攻は伝統的に行事や学内業務もいろいろあって、なかなかに忙しい。だが小宮先生は、少しも嫌な顔をなさらずに、移つてきた当初からいろいろと積極的に担つて下さつた。新入生カンファレンスにも参加され、学生にまじつて飄逸な句をつけていらっしゃつた。私などは偉そうに講義では和歌の話などするのに、実作はぜんぜん自信がなくて、学生にまじつてなどできずにいたのだけれども。講師招待会にも謝恩会にもいらっしゃつ

て、そこで歓談や全体に向けてのお話しなどのなかで、思いもかけず先生の素顔に触れることも多かつた。先生は長く本学にいらっしゃったので、ことばの端々から昔ののんびりとした東女の雰囲気が伝わってくるようで、二十一世紀になつてから東女にやつてきた私には、いろいろと興味深かつた。ここ十年ほど、東京女子大はいろいろと改革を重ねており、学部に統いて大学院の改組もあつたのだが、ここというところで含蓄あるご意見をお寄せ下さつたし、だんだんに卒論や修論の副査も担つて頂くようになつた。最初はこちらも遠慮する気持ちもあり、多少は節度もあつたのだけれど、安藤先生が学部長になられ、鉄野先生が異動されたのにつれて、どんどん専攻内が忙しくなり、小宮先生にお願いすることが増えていった。それらを小宮先生は快く引き受けて下さつた。今振り返つてみると、日本文学専攻の新たなメンバーとして先生とゆつくりごいつしょできたのは最初の一、三年だけだつたのではないかと思う。気がつくと誰もが忙しくなつていて、先生にはいろいろとお願いしてしまつていた。本当はここ数年、先生は病を得られ、サバチカルの最中には入院もされていて、先生にはいろいろとお願いしてしまつて、二〇一四年度は傍から見ても随分とお具合が悪いのではないかと思われた。それでも先生は一時的なものだからとおつしやつて、できる限り協力して下さつたし、前号の大久保喬樹先生の退官記念号には玉稿をお寄せ下さつた。結局このご論文が絶筆のような形になつてしまつた。

本来はこの号は「小宮彰先生を送る」と小宮先生の退官記念号で、小宮先生ご自身がまた健筆を振るつて下さるはずだつたのである。退官まであと一年を残すところで、突然に旅立たれてしまわれたこと、お具合がとわかつていながら、ついいろいろとお願いしてしまつたこと、悔やんでも悔やみきれない。それでも生前、日本文学専攻の専門科目（ゼミ）を担当されて、講師招待会で「日文の学生の気風の良さを、演習を担当して私も実感しました」とおつしやつてくださつた。縁あって日本文学専攻で共に過ごさせていただいたことが、先生のお心にも良いものであつたのならと切に思う。

小宮先生が亡くなつてから、学内外の多くの方が先生を慕つていらしたことを知つた。博学で話が面白かつた、

と皆さんおっしゃっていた。先生の研究室は、学外の方たちのご協力であつという間にきれいになつた。先生のご蔵書と思い出は、それぞれの場で生き続けているはずである。

生前の先生のさまざまご尽力に心より感謝し、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二〇一六年三月

日本文学専攻主任 今井久代

小宮 彰 先生 主要業績目録

## 著 書

- 一九〇〇九年 一月 『ディドロとルソー 言語と《時》』——十八世紀思想の可能性』(思文閣出版)
- 一九七四年十一月 学術論文
- 「安藤昌益とジャン＝ジャック・ルソー——文明論としての比較研究」(『比較文學研究』第二十六号、東大比較文學會)
- 一九七八年 六月 「ルソーと不可逆の〈時〉」(『思想』No. 467、岩波書店)
- 十月 「起源と剩余——六十年代以降のルソー研究の動向から」(『社会思想史研究』社会思想史学会年報) 第二号、社会思想史学会
- 「クロード＝アドリアン・エルヴェシウスの知の地平——『Juger,c'est sentir』をめぐつて」(『フランス語フランス文学研究』Vol. 33、日本フランス語フランス文学会)
- 一九八一年 九月 「ディドロの比喩——『ダランベールの夢』讀解の試み」(『東京女子大学紀要論集』第
- 一九八二年 一月 『ディドロとルソー 言語と《時》』——十八世紀思想の可能性』(思文閣出版)
- 一九八三年 六月 「ディドロとルソー 内在と外在——言語コミュニケーションをめぐつて」(『思想』No. 708、岩波書店)
- 十一月 「自伝の〈時〉——新井白石『折たく柴の記』における〈時〉の表現をめぐつて」(佐伯彰一編『自伝文学の世界』、朝日出版社)
- 一九八四年 十月 「ディドロの言語と〈時〉——『聲睡者についての手紙』の考察を中心に」(『思想』No. 724、岩波書店)
- 一九八五年十一月 「〈啓蒙〉の知と主体の問題——ディドロ・ルソー・エルヴェシウスの視界」(大森莊藏ほか編『新・岩波講座〈哲学〉』第十五卷 哲学の展開 哲学の歴史2)、岩波書店)
- 一九八七年 一月 「明治期文明論の時間意識——徳富蘇峰『将来之日本』における明治日本の現在」

三十二卷第一号)

「シュピツツァーとディドロ——文体分析と時間性」(『東京女子大学附属 比較文化研究所紀要』第四十三卷)

一九八九年五月	「『東京女子大学附属 比較文化研究所紀要』第四十八卷)
一九九二年一月	「十九世紀人類学と近代日本——足立文太郎を中心として」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五十三卷)
一九九四年十月	「科学テクストの文体——大橋力『情報環境学』」(大沢吉博編『叢書比較文学比較文化6テクストの発見』、中央公論社)
一九九七年一月	「寒月君」と寺田寅彦——西洋文明としての近代科学」(『東京女子大学比較文化研究所紀要』第五十八卷)
二〇〇二年九月	「寺田寅彦の文体——生命の物理学」(『比較文學研究』第八十号、東大比較文學會)
二〇〇五年九月	「寺田寅彦の物理学と〈二つの文化〉」(『東京女子大学紀要 論集』第五十六卷一号)
二〇一四年九月	「寺田寅彦の文学表現としての「隨筆」について」(『日本比較文学会東京支部研究報

## 書評

一九七七年十一月	「日野竜夫著「江戸人とユートピア」」(『比較文學研究』第三十二号、東大比較文學會)
一九八一年七月	「作田啓一著「ジャン＝ジャック・ルソー——市民と個人」——ルソーと〈近代〉の閉域」(『思想』No. 685、岩波書店)
一九八二年四月	「竹田晃著「中国の幽靈——怪異を語る伝統」」(『比較文學研究』第四十一号、東大比較文學會)
一九九〇年三月	「中江兆民のフランス」井田進也」(『比較文學』第三十二卷、日本比較文学会)
一九九三年六月	「牧野陽子著「ラフカディオ・ハーン」出版記念会」(『比較文學研究』第六十三号、東大比較文學會)
一九九五年三月	「B・M・ボダルト＝ペイリー著(中直一

(『比較文学』第五十四卷、日本比較学会)

訳)「ケンベルと徳川綱吉」(『比較文学』第三十七卷、日本比較文学会)

その他

一九九九年 八月 「福沢諭吉のすゝめ」(大嶋仁)」(『比較文學研究』第七十四号、東大比較文學會)

二〇〇二年 三月 「稻賀繁美編著『異文化理解の倫理にむけて』」(『比較文學』第四十四卷、日本比較文学会)

一九七七年 六月 「パリ・日本・テクスト」(『比較文學研究』第三十一号、東大比較文學會)

一九八〇年 十月 「比較文化研究、三つの可能性」(『比較文化』二七一、東京女子大学附属比較文化研究所)

一九八一年 三月 「若手研究者懇談会」のこと」(『比較文化』二七一、東京女子大学附属比較文化研究所)

「日本比較文学会会員研究分野ディレクトリ補遺」(『比較文学』第三十五卷、日本比較文学会)

二〇〇四年 三月 「千葉一幹著『賢治を探せ』」(『比較文学』第四十六卷、日本比較文学会)

一九九三年 三月 「野田康文著『大岡昇平の創作方法』

」(『比較文学』二七一、東京女子大学附属比較文化研究所)

二〇〇七年 三月 「浮城記」「野火」「武蔵野夫人」」(『比較文學』第四十九卷、日本比較文学会)

「比較文学を学ぶための文献案内」(松村昌家編『比較文学を学ぶ人のために』、世界思想社)

二〇一二年 三月 「二〇一一年度日本比較文学会賞受賞

」(『比較文学』二〇一一年度日本比較文学会)

加瀬佳代子著『M・K・ガンディーの真理と悲暴力をめぐる言説史——ヘンリー・ソロー、R・K・ナラヤン、V・S・ナ

イボール、映画『ガンジー』を通して』

- 一九九八年 十月 「第十五回公開シンポジウム 生命倫理の  
比較文化（司会）」（『比較文化』四五一）、  
東京女子大学比較文化研究所
- 一〇〇四年 三月 「俳諧と物理学——寺田寅彦の2つの世界  
——」（『比較文化』五〇、東京女子大学比  
較文化研究所）
- 一〇〇五年十一月 「追悼・大澤吉博教授 大澤吉博さんとと  
もに歩む」（『比較文學研究』第八十六号、  
東大比較文學會）
- 一〇〇九年 六月 「追悼・内藤高教授 内藤高さんのこと」  
（『比較文學研究』第九十三号、東大比較文  
學會）
- 一〇一年 九月 「シンポジウム 映画の表現、文學の表現  
——比較文學からの視野」（『日本比較文學  
會東京支部研究報告』第八号）
- 一〇一三年十二月 「比較文學比較文化で読み直す寺田寅彦  
の文学と科学」（『東京女子大学 學報』  
一〇一三年度第三号）

## 編集後記

「日本文學」第百十二号は、いつも通り力のこもった學術論文数編に加えて、昨年一月十七日に急逝された小宮彰先生の追悼号として、今井久代先生による追悼文と主要業績目録を掲載した。本編集後記でも改めて先生の追憶を記したい。

そもそもこの号を担当した中野は、本学に着任したのが二年前であり、小宮先生と長くお付き合いさせて頂いたわけでは決してない。したがって、改組により先生が日本文學専攻の所属になった経緯や、輝かしい先生のご業績などを語ることもできない。この辺りは前述の追悼文等を、是非ともお読み頂きたい。

しかし僅か二年ではあっても、その中で感じられた先生の温かいお人柄は、大変印象に残っている。着任当初、まだ自分が本学に慣れていなかつた四月の頃、「あなたは兼好がご専門でしたか。自分も寺田寅彦という隨筆家を読んでいるから、似ていますね」と、優しくお声かけ下さったことは、今も忘れられない。もっと多くの言葉を交わし、先生からご教示を頂きたかったと思うばかりである。

小宮先生の追悼号の編集を担当したことが、少しでもあの時の励ましへの応えになつたことを願いつつ、筆を擱きたい。

（中野貴文）

東京女子大學日本文學 第百十二號

二〇一六年三月十五日 発行

編集兼発行人 東京女子大学 學會  
印 刷 所 株式会社 文 伸

〒167-8385 東京都杉並区善福寺二丁目六-一

發 売 元 東京女子大学日本文學研究会  
振替口座

00-110-11685-18番  
電 話 (五三八二) 6301

 閉じる